

空港関連事業・阪南市土地区画整理事業に伴う

箱作今池遺跡発掘調査報告書

-大阪府阪南市箱作所在-



1996年6月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

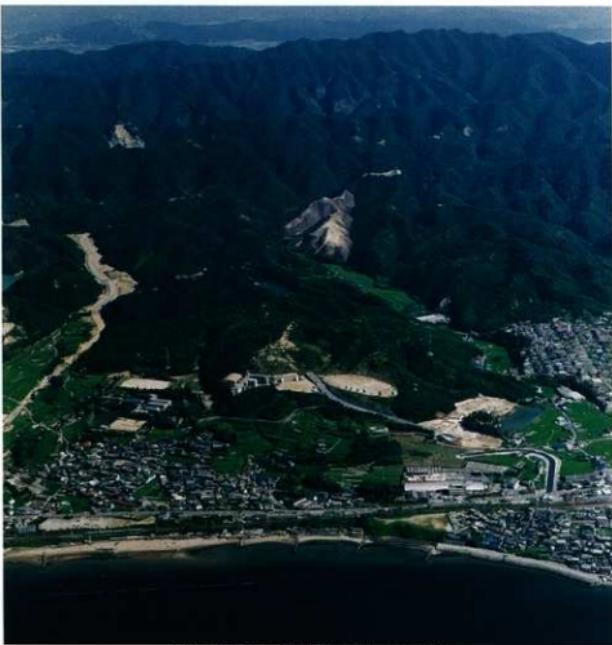
空港関連事業・阪南市土地区画整理事業に伴う

箱作今池遺跡発掘調査報告書

- 大阪府阪南市箱作所在 -

1996年6月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター



箱作今池遺跡 発掘調査前風景（1986年）



箱作今池遺跡 発掘調査風景（1993年）



鳳招（表）



鳳招（裏）

序 文

泉州地域は、和泉山脈から大阪湾へ派生する丘陵と、河川の数々が織りなす豊かな自然と大阪湾に面して発展してきた地域です。

泉州沖に関西国際空港の建設が計画され、昭和60年にその工事に先立つ数多くの遺跡の調査が実施されました。中世の山城である井山城、石材の産出加工遺跡であるミノバ石切場跡、その石工の集落跡の飯の峯遺跡や貝掛遺跡など大規模な発掘調査が実施され、とりわけ阪南市域の歴史の考古学的な解明が飛躍的に前進する成果が示されました。ここに報告する箱作今池遺跡の調査もその一環として発掘調査が行われたもので、空港開港に伴って整備が急がれる関連の各種公共事業や区画整理事業に先立ち当センターが発掘調査を実施したものです。

箱作の地は京都上賀茂神社の社領として知られ、平安時代には「菅作庄」との記述が残る歴史の古い地です。平成5年に着手し3年間にわたる延べ15,400m²に及ぶ発掘調査では奈良時代の掘立柱建物群、中世の寺院跡や集落跡など、当該地域の歴史を塗り替える程の考古学的資料が蓄積される結果となり、多大な成果をあげることができました。

調査を実施するに当たり、地域の皆様や阪南市教育委員会、大阪府企業局などの関係諸機関のご理解とご協力を賜り、発掘調査が円滑に進められましたことに、ここに深く感謝の意を表すものです。今後とも当センターの事業に対し、より一層のご理解とご支援を賜りますようお願いいたします。

平成8年6月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

理事長 坪 井 清 足

例　　言

- 1 本書は、空港関連事業・阪南市箱作土地区画事業に伴う大阪府阪南市箱作所在「箱作今池遺跡」発掘調査報告書である。
- 2 調査は、平成5年7月1日に着手し、平成8年3月30日に終了した。なお、平成5年度及び6年度は財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施し、平成7年度は組織統合改変により財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施した。
- 3 調査は以下のとおりである。

平成5年度　財団法人大阪府埋蔵文化財協会

　　調査課長 石神怡・調査第一係長 田中和弘

　　調査担当 技師 服部美都里・上野仁

平成6年度 同調査課長 石神怡・調査第一係長 大野 薫

　　調査担当 技師 服部美都里

平成7年度　財団法人大阪府文化財調査研究センター

　　調査部長 井藤徹

　　調整課長 中西靖人

　　南部調査事務所長 藤田憲司・調査第一係長 大野薰

　　調査担当 技師 服部美都里

遺物撮影は主任技師立花正治が担当し、加茂幸彦・久禮孝志がこれを補佐した。

- 4 本調査の実施にあたり、大阪府関係諸機関をはじめ下記の方々にご指導賜った。記して感謝の意を表する次第である。(敬称略)
広瀬和雄・福田英人・大楽康宏・橋本高明・杉本清美・竹本文孝・西口陽一(大阪府教育委員会)、三好義三・田中早苗(阪南市教育委員会)、仮屋喜一郎(泉南市教育委員会)、吉田珠巳(八尾市教育委員会)、岡田彰一(兵庫県教育委員会)、石神幸子・村上富喜子・仁木昭夫・岡本圭司(当センター)、調査参加者及び整理作業 福山綾・大井裕美子・小川佐起子・黒川敦美・内山信子・松村より子・中山由佳里
- 5 本書の編集は服部が行った。

凡　　例

- 1 遺跡の位置は、国土座標第VI座標系に基づいて表示している。標高は全てT・P・(東京湾標準潮位)で示している。
- 2 土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」1995年版による。
- 3 土器実測図の断面は弥生土器・土師器・近世陶磁器は白抜き、須恵器と須恵質は黒塗り、黒色土器及び瓦器瓦質はスクリーントーン、石器は斜線で表示した。
- 4 実測図の縮尺は基本的に遺構平面図が1/100と1/200、各遺構と断面図を1/80、遺物は土器類を1/4、金属製品を1/2、瓦を1/4、石製品を1/4と1/8で統一している。
- 5 遺構番号・遺物番号は記載順に通し番号を付し、遺物の実測図と写真番号は一致する。

目 次

巻頭カラー図版

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経過

第1節 調査に至る経過	1
第2節 地理的・歴史的環境	2

第2章 発掘調査の概要

第1節 調査の方法	4
第2節 基本層序	6

第3章 発掘調査の成果

第1節 奈良時代の遺構	9
第2節 鎌倉～室町時代の遺構	15
第3節 江戸時代の遺構	22
第4節 包含層出土遺物	24

第4章 まとめ	35
---------------	----

挿 図 目 次

第1章 第2節	第1図 箱作今池遺跡位置及び周辺遺跡分布図
第2章 第1節	第2図 調査地区割図
第2節	第3図 基本層序
	第4図 遺構配置図
第3章 第1節	第5図 奈良時代掘立柱建物1・2、焼土坑6 平断面図及び出土遺物
	第6図 奈良時代掘立柱建物3・4 平断面図及び出土遺物
	第7図 奈良時代掘立柱建物5 平断面図
	第8図 奈良時代溝7 平断面図
第2節	第9図 鎌倉～室町時代掘立柱建物8・9 平断面図
	第10図 鎌倉～室町時代掘立柱建物10・11・12 平断面図
	第11図 鎌倉～室町時代掘立柱建物13・14・15、溝17 平断面図
	第12図 鎌倉～室町時代掘立柱建物16 平断面図
	第13図 鎌倉～室町時代溝18 平断面図
第3節	第14図 江戸時代池20（天神池） 平断面図及び出土遺物
第4節	第15図 出土遺物（1）
	第16図 出土遺物（2）
	第17図 出土遺物（3）
	第18図 出土遺物（4）
	第19図 出土遺物（5）
	第20図 出土遺物（6）
	第21図 出土遺物（7）
	第22図 出土遺物（8）
	第23図 出土遺物（9）
	第24図 出土遺物（10）
第4章 まとめ	第25図 箱作遺跡変遷図
	第26図 泉州地方 荘園名分布図
	第27図 江戸時代 箱作村絵図

表 目 次

第1表 検出遺構および出土遺物一覧表

第2表 出土遺物一覧表（1）～（8）

図版目次

扉 箱作駅前線

- 1 奈良時代 挖立柱建物
- 2 奈良時代 挖立柱建物
- 3 奈良時代 挖立柱建物
- 4 奈良時代 溝・土層断面
- 5 奈良・鎌倉～室町時代 挖立柱建物、溝
- 6 鎌倉～室町時代 挖立柱建物、溝
- 7 鎌倉～室町時代 挖立柱建物・柱穴断面
- 8 奈良・鎌倉～室町時代 溝、土坑
- 9 奈良・鎌倉～室町時代 溝断面
- 10 奈良・鎌倉～室町時代 溝断面・遺物出土状況
- 11 江戸時代 池（天神池）全景及び堤断面
- 12 江戸時代 鋤溝
- 13 江戸時代 鋤溝
- 14 出土遺物（1）石器
- 15 出土遺物（2）石器
- 16 出土遺物（3）石器
- 17 出土遺物（4）須恵器
- 18 出土遺物（5）須恵器・製塙土器
- 19 出土遺物（6）土師質甕・製塙土器・黒色土器
- 20 出土遺物（7）須恵鉢・瓦質鉢および羽釜
- 21 出土遺物（8）土師質皿・瓦質皿
- 22 出土遺物（9）瓦器碗
- 23 出土遺物（10）白磁・青磁（表）
- 24 出土遺物（11）白磁（表・裏）
- 25 出土遺物（12）青磁（表・裏）
- 26 出土遺物（13）土師質蜻蛉壺
- 27 出土遺物（14）土師質および瓦質 土錘
- 28 出土遺物（15）風招・錢・釘
- 29 出土遺物（16）近世陶磁器
- 30 出土遺物（17）瓦・砥石
- 31 出土遺物（18）石製品
- 32 箱作村絵図（1）
- 33 箱作村絵図（2）

第1章 調査に至る経過

第1節 調査に至る経過

大阪府南部に位置する阪南市は近年人口の増加が著しく、1991年の市制施行後は特に大阪南部の泉州地方と和歌山北部のベッドタウンとして、急速に宅地造成等の開発が進行した地域である。昭和40年代頃まではあまり人口の増減はなく、昭和47年南海町と東鳥取町が合併し阪南町となった時点での人口約32000人に対し、平成12年の現在は約54000人とこの四半世紀の間におよそ1.7倍に達しており、都市整備が急務となっている。

昭和60年、関西国際空港建設に伴う地域整備事業の一環として箱作土地区画整理事業が計画され、埋蔵文化財の取り扱いについて大阪府教育委員会及び関係機関で協議が持たれ、当該地における埋蔵文化財の状況を改めて把握する必要が確認された。これを受け、昭和61年（1986年）に財團法人大阪府文化財協会によって分布調査が実施された。これに加え昭和63年（1988年）からは阪南市教育委員会による分布調査、試掘調査も実施された。

その結果、縄文時代から近現代に至るまで複合的に遺物の散布が認められ、狭小な開析谷を中心とする地形ではあるが広範囲に遺跡の広がりが想定されることが確認された。また試掘調査では中世包含層も部分的に確認され、これらの結果を基にそれまでの範囲を大きく拡大し箱作今池遺跡として周知されることとなった。また当該計画事業に関しては、基本的に区画道路予定地部分の全てについて発掘調査を実施することが必要と判断されるに至った。

このような経緯を踏まえ再度、大阪府教育委員会と関係機関で協議が持たれ、本事業が空港関連事業に伴う地域整備事業として位置づけられていることから早急に当該事業の実施に関して必要な発掘調査を実施するとの判断がなされた。これを受け大阪府教育委員会の指導のもと、平成5年度（1993年）より財團法人大阪府埋蔵文化財協会が発掘調査を実施することとなった。平成7年4月からは統合・改称した財團法人大阪府文化財調査研究センターが引き続き発掘調査を実施し、平成8年（1996年）3月、全ての現地調査を終了した。

その後、同センター南部調査事務所において遺物整理作業に着手し、平成8年6月までに全ての作業を完了した。

第2節 地理的・歴史的環境

本遺跡は、和泉山脈から大阪湾に派生する丘陵上に展開する集落跡である。大阪湾の現海岸線からは200m程東の位置に当たり、漁労、海上交易には適した立地条件を有している。またこうした海路に加え熊野街道にも面し、古代より交通の要衝地として様々な様相を示している。

地形的には東から西へ和泉山脈からの緩やかな傾斜を見せ、南北方向はいずれも蛇行する幾筋もの小河川によって形成された段丘と狭小な平野部から成り立っている。箱作今池遺跡は、积迦坊川と飯の峯川に挟まれ、その河岸段丘によって幾重にも形成された狭小な平坦面を持つ段丘上に展開する遺跡である。

泉州地方の多くの遺跡がこうした地形と類似した立地条件を示すが、特に男里川が形成した平野部を除いて、阪南市域以南では丘陵部が大阪湾に向け迫り平野部は極端に狭小となる状況を示す。

またこのような地形の制約の中で断続的にではあるが、周辺の各遺跡を含め縄文時代から近世に至るまで、各時期の遺構や遺物が確認されている。各時代ごとの遺跡の概要是、以下のとおりである。

旧石器時代及び縄文時代に関しては、明確な遺構に伴う資料は確認されていない。神光寺（蓮池）遺跡において表面採取された有舌尖頭器が知られるのみで資料の増加には恵まれていない。石器や縄文土器片等断片的な資料が各遺跡で認められるが包含層等の二次堆積に伴う資料が大半を占める。近年調査された向出遺跡では縄文時代の墓域の存在が明らかとなり注目される。

弥生時代に関しても、土器は検出されるものの原位置を保つ資料に乏しく、生産域や墓域を明確に示す事例には乏しい状況にある。向山遺跡では、段丘上に展開する弥生時代中～後期の集落が確認されている。

古墳時代については、中期に箱作古墳、後期は高田山古墳・塚谷古墳・玉田山古墳などの存在が知られる。また前述の向山遺跡においては阪南市初の小石室が検出されたほか、6世紀の住居跡も検出されている。

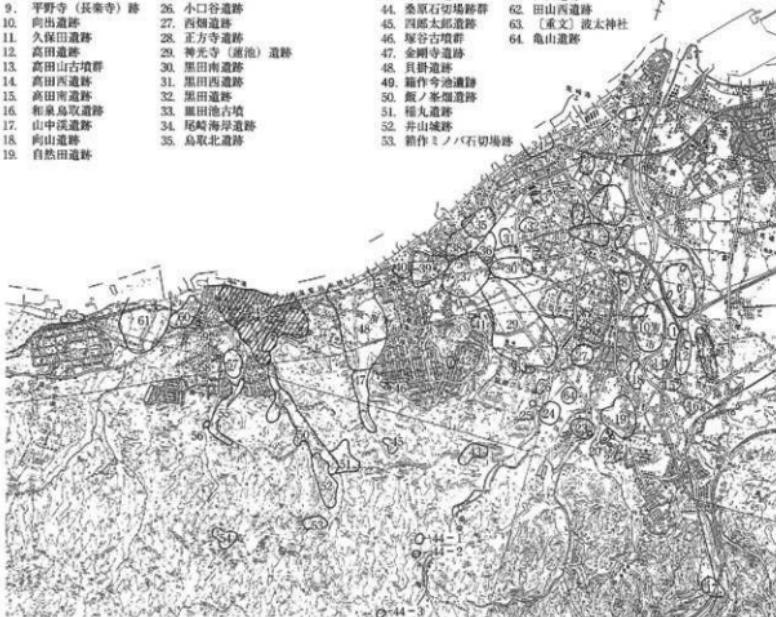
古代では田山遺跡が知られるが、波有手遺跡から出土した墨書き土器等断片的な資料が認められるのみである。

鎌倉時代以降は金剛寺遺跡や平野台遺跡等で寺院の存在を示す遺構や遺物が確認されている他、井戸遺跡や亀川遺跡など集落遺跡の発見が相次ぎ、当該市域での中世集落の範囲が明らかとなりつつある。

江戸時代に至るとミノバ石切場跡と飯の峯遺跡等、石材生産と石工集落の関係を示す調査成果が明らかとなっている。



- | | | | |
|--------------|-----------------|--------------|------------------|
| 1. 福島遺跡 | 19. 自然田遺跡 | 36. 鳥取遺跡 | 54. 箱作細谷石切場跡 |
| 2. 尾崎清水遺跡 | 20. 玉田山古墳群 | 37. 鳥取市遺跡 | 55. 荘原遺跡 |
| 3. 馬川上遺跡 | (府内) 史玉田山上方下円古墳 | 38. 波有手遺跡 | 56. 箱作仏屋谷石切場跡 |
| 4. 馬川下遺跡 | 21. 玉田山遺跡 | 39. 西島取遺跡 | 57. 箱作西河跡 |
| 5. 下出雲遺跡 | 22. 玉田山領恩器窯跡 | 40. 成合跡 | 58. 箱作古墳 |
| 6. 下出雲遺跡 | 23. 寺田山遺跡 | 41. 三味谷遺跡 | 59. (付録) 有文茂神社本殿 |
| 7. 内畠遺跡 | 24. 井向遺跡 | 42. 三井丸谷山道跡 | 60. 田山東遺跡 |
| 8. 室堂遺跡 | 25. 石山山遺跡 | 43. 加瀬谷遺跡 | 61. 田山道路 |
| 9. 平野寺(長秦寺)跡 | 26. 小口石遺跡 | 44. 条作石切場跡群 | 62. 田山西遺跡 |
| 10. 向出雲遺跡 | 27. 西畠遺跡 | 45. 四郎太郎遺跡 | 63. (重文) 渡太神社 |
| 11. 久保田遺跡 | 28. 正方寺遺跡 | 46. 塚谷古墳群 | 64. 亀山遺跡 |
| 12. 高田遺跡 | 29. 神光寺(道池)遺跡 | 47. 金剛寺遺跡 | |
| 13. 高田山古墳群 | 30. 黒田南遺跡 | 48. 具野遺跡 | |
| 14. 高田北遺跡 | 31. 黒田西遺跡 | 49. 箱作今池遺跡 | |
| 15. 高田南遺跡 | 32. 黒田遺跡 | 50. 斧ノ峯遺跡 | |
| 16. 和泉島取遺跡 | 33. 黒田古墳 | 51. 稲丸遺跡 | |
| 17. 山中流遺跡 | 34. 尾崎海岸道路 | 52. 井山路跡 | |
| 18. 向山遺跡 | 35. 烏取北道路 | 53. 箱作ミバ石切場跡 | |
| 19. 自然田遺跡 | | | |



第1図 箱作今池遺跡位置及び周辺遺跡分布図

第2章 発掘調査の概要

第1節 調査の方法

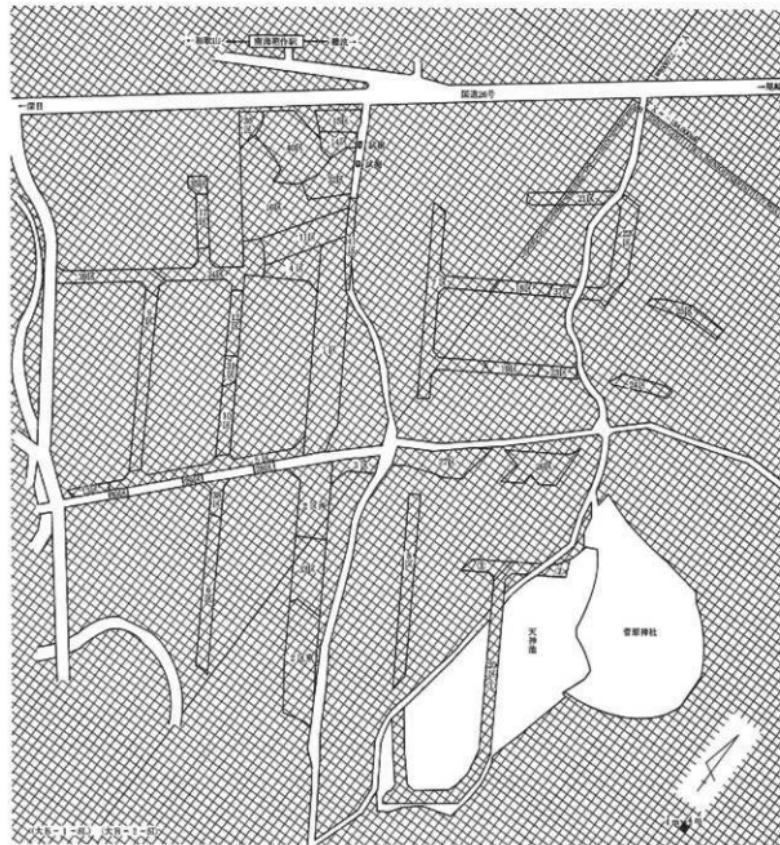
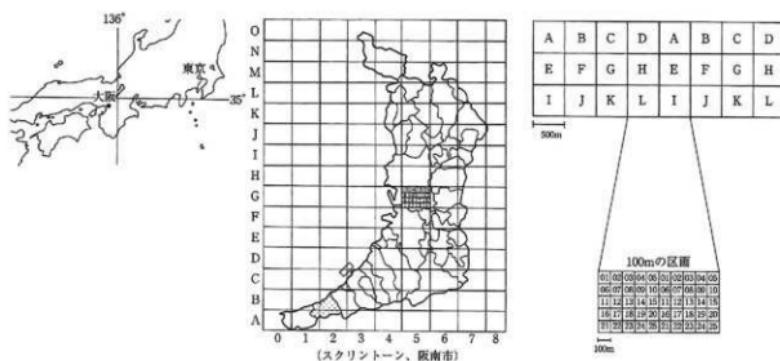
調査範囲は、南海本線箱作駅の山側一帯の区域で、箱作今池遺跡全体からすると東半部分に当たる。今回の発掘調査地区は、事業地内の「駅前広場」部分及び南海本線箱作駅からスカイタウン造成区域に至る幅16mの南北の街路「箱作駅前線」に当たる部分と、その街路に東西に取付く幅8mの「区画道路」部分である。

調査は工事予定との調整及び道路予定地の内、用地等の協議が完了した部分から順次着手せざるを得ないと判断から、調査地区が41箇所に分断される結果となり、下記に示すとおり延べ3年間の期間を要することとなった。(第2図)

1993年7月～1994年3月	01区～10区
1994年3月～1994年9月	11区～19区
1994年10月～1995年3月	20区～31区
1995年10月～1996年3月	32区～41区

調査は第VI系国土座標を使用し、1/2500の地形図を区画の基本として、4m四方を最小区画として用いている。遺物の取り上げは基本的にこの最小区画を単位として行った。

また各調査区が極めて小規模に分断されたことに加えて、工事の進捗を考慮し数地区の調査を並行して行う必要が生じたため、遺構番号及び遺物番号は各調査区ごとに付して実施せざるを得ない状況となつた。従って隣接する調査区の同時期の遺構であっても調査年次等が異なる場合、複数の名称が付与されるなどの問題が生じたため、本報告では各調査区ごとの報告とせず、全調査区にわたり時期ごとに遺物が出土した主要な遺構を中心に検討を加え報告することとした。同時期の遺構の範囲や同一面で検出されながら出土遺物が認められない遺構については、地区ごとの呼称を用いて報告することにして混乱を生じないように努めた。さらに検出された遺構については、各調査区ごとに個別の名称等を一覧にまとめて記載することとした。



第2図 調査地区割図

第2節 基本層序

調査区の現在の地目は水田及び畠であり、現地表下には近現代の耕作土（第1～2層）が認められる。その耕作土直下に、ほぼ全域から中世包含層（第3層）が検出され、中世後期に本遺跡が大規模に開発されている状況が窺われる。第3層直下で地山層に至り、その上面で古代及び中世前半の掘立柱建物群等の遺構が検出される。各層の堆積状況は以下の通りである。

第1層 現代耕土及び床土層である。層厚10～35cmを測る。(①～②)

現在認められる第1層は大半が戦後の開発により形成されており、岬町や阪南市を中心とする泉州地方で生産された瓦片や近現代陶磁器片が含まれる。

第2層 近世耕土及び床上層である。層厚5～10cmを測る。(③～④)

全域に薄く堆積する。出土遺物は希薄で、近世陶磁器の細片や土錐がわずかに認められる。周辺の右切場等で多く出土する石製品の未製品や廃棄品の転用が、水田を区画する石垣や水口の水止め等に認められる。

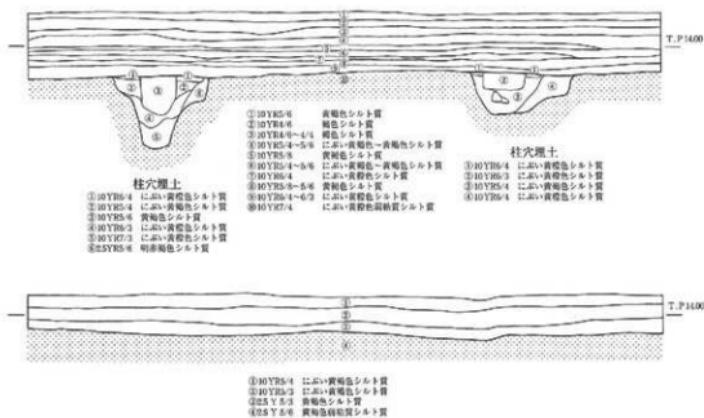
第3層 中世耕土、床土層及び整地層である。層厚20～65cmを測る。(⑤～⑧)

調査区全域で認められる中世包含層と水平に堆積する中世耕作土である。大規模な土地改変のためか旧地形を埋め立てるなどした状況が窺われ、この時点で景観がかなり改変されたものと思われる。耕作土層からの遺物の出土は極めて希薄である。整地層からは瓦器碗や皿といった日常雑器や、青磁や白磁が出土する他、黒色土器、綠釉陶器、須恵器、土師器等といった中世以前の遺物も含まれる。

第4層 部分的にのみ遺存する中世以前の包含層である。層厚5～15cmを測る。(⑨)

地山直上に部分的に堆積が認められる。古墳時代～奈良時代の土器片やサヌカイト片等が含まれる。

第5層 遺物の包含等は認められず地山層と判断される層位である。粘質シルト層と砂疊層で構成される。(⑩)



第3図 基本層序



第4図 遺構配置図

第3章 発掘調査の成果

検出された各時代の遺構は、主として蛇行しつつ大阪湾にそそぐ飯の峯川右岸の段丘上に展開し、遺構の総数は約5000に及ぶ。主要な遺構は掘立柱建物・溝・自然流路・井戸・鴨溝等が挙げられる。本報告では出土遺物等から時期を明確にすることが可能な遺構を中心に、以下各時代ごとに述べることとする。

第1節 奈良時代の遺構と遺物

7区を中心に奈良時代の掘立柱建物跡が集中して検出された。いずれも地山が砂疊層や低湿な区域を避け、シルト層をベースとした微高地に集中して形成された状況を示す。7区と27区において掘方が円形を呈するもの10基、方形を呈するもの4基が検出されたが、構成する掘立柱建物は5棟を復元しうるのみである。これら奈良時代の遺構は、中世には削平を受けたものと見られ、検出面では柱穴の最深部と掘方底部がわずかに遺存する状態であった。建物1～4は7区の北側に集中して検出されている。建物5はやや離れて単独で27区で検出されており、奈良時代の遺構の分布範囲としては南限を示すものである。各掘立柱跡の埋土は、掘方が黄橙色系シルト層、柱痕部はにぶい黄橙色系のシルト層を基本とし、検出面の地山はにぶい黄橙色系の弱粘質シルト層である。

掘立柱建物1（第5図）

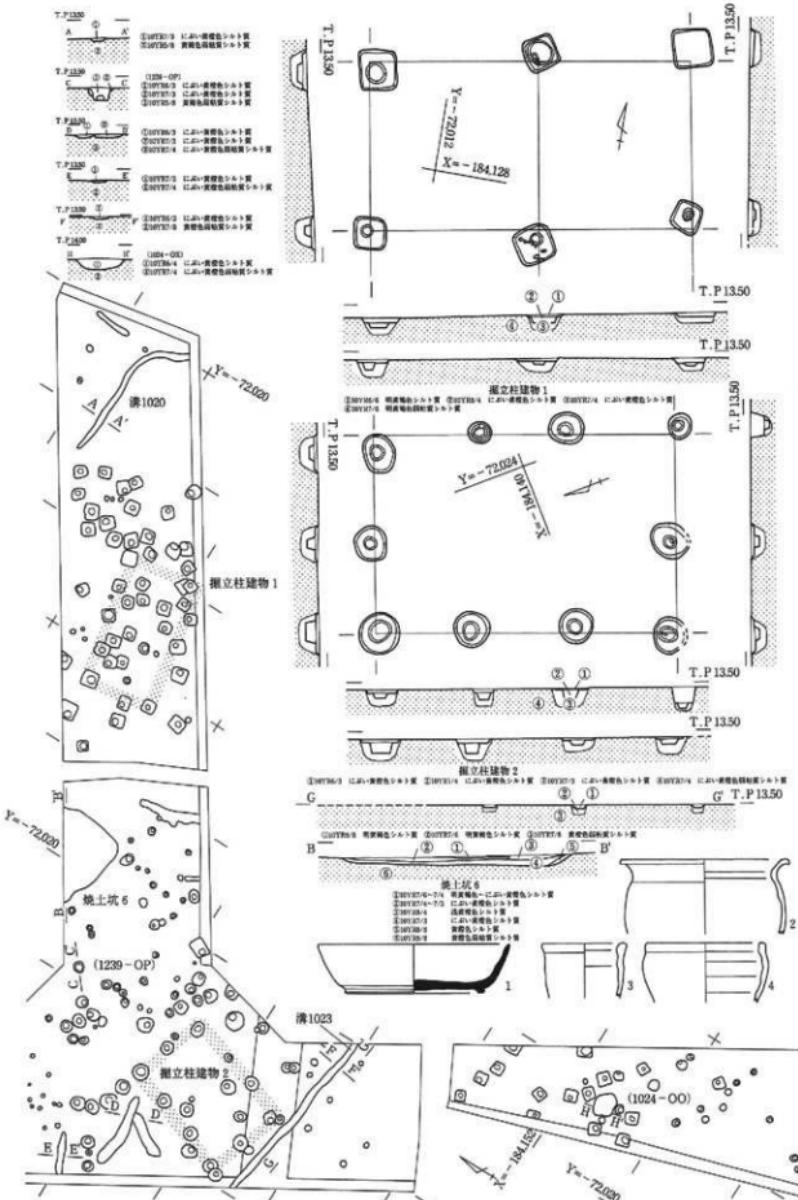
7区東端で検出した総柱の掘立柱建物である。東西2間、南北1間分が検出されたが、本来は南側調査区外へさらに数間の規模を有する可能性が高い。柱間は東西が5.28m、南北2.60mを測る。各柱穴の掘形は平面が隅丸方形を呈し一辺約0.4～0.6m、柱痕部は径0.2～0.3mを測る。遺物の出土は認められない。

掘立柱建物2（第5図）

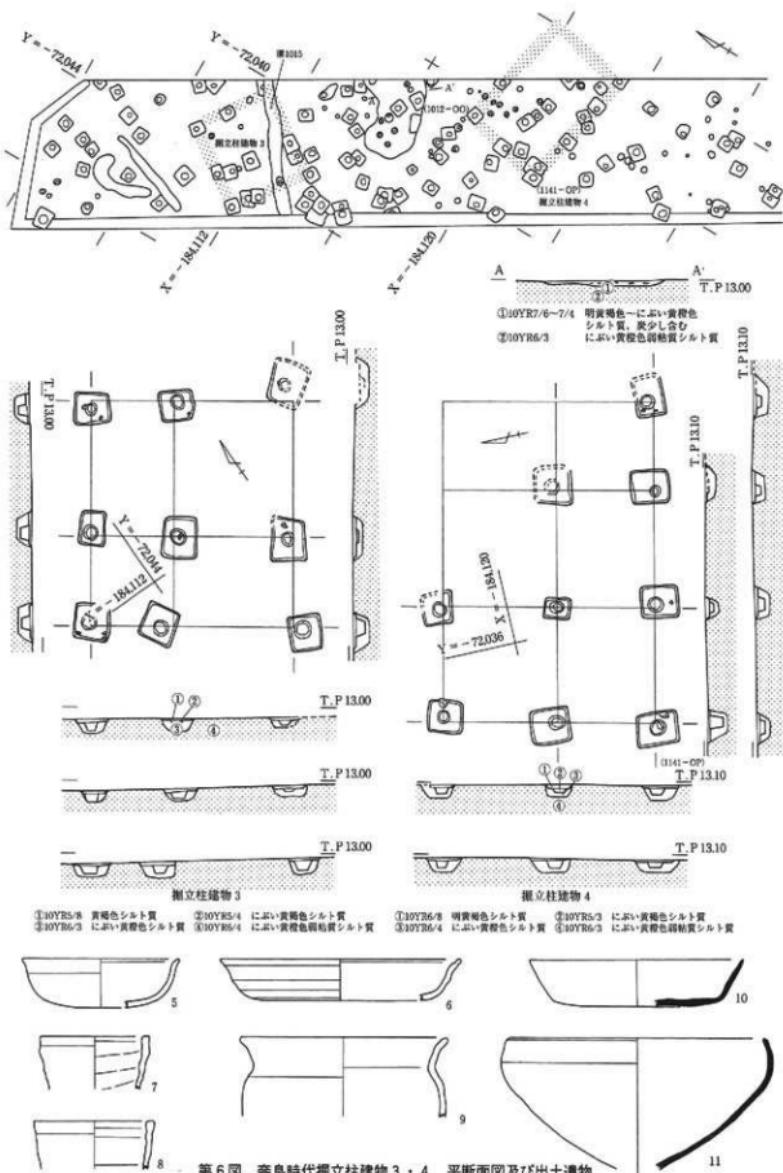
7区東端で検出した2間×3間の掘立柱建物である。桁行方向の柱間1.45m、梁行の柱間1.50mを測る。柱穴の掘形は楕円形を呈し、径約0.4～0.7m、柱痕部は径約0.2mを測る。検出された建物の内、唯一の円形の掘方による柱穴で構成されるものである。掘立柱建物1と同一面で検出されたが遺物の出土が皆無なため同時期に存在したかについては不明である。同一面での遺構の検出状況等から判断して、奈良時代に属するものと考えられる。

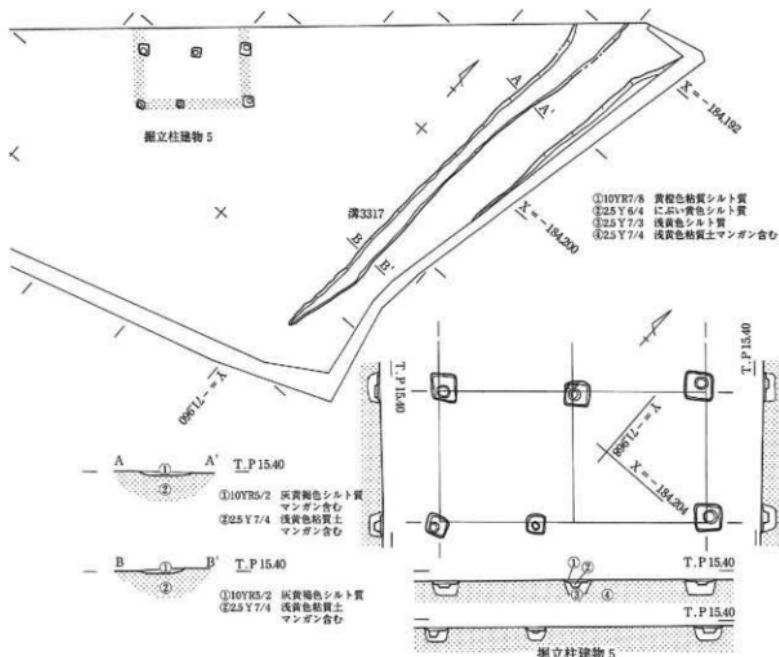
掘立柱建物3（第6図）

7区北端で検出した総柱の掘立柱建物である。検出された他の建物と比し主軸を南北方向に対し東へ約40度ずれる状況を示す。また2間×2間分を検出したが柱穴間がそれぞれ1.48m：2.02m、1.16m：2.34mと一定せず、調査区外を含めさらに異なる規模の建物の一部である可能性も想定される。各柱穴の掘形は方形を呈し一辺0.3～0.6m、柱痕部は径約0.25mを測る。遺物の出土は皆無である。



第5図 奈良時代掘立柱建物1・2、焼土坑6 平断面図及び出土遺物





第7図 奈良時代掘立柱建物 5 平断面図

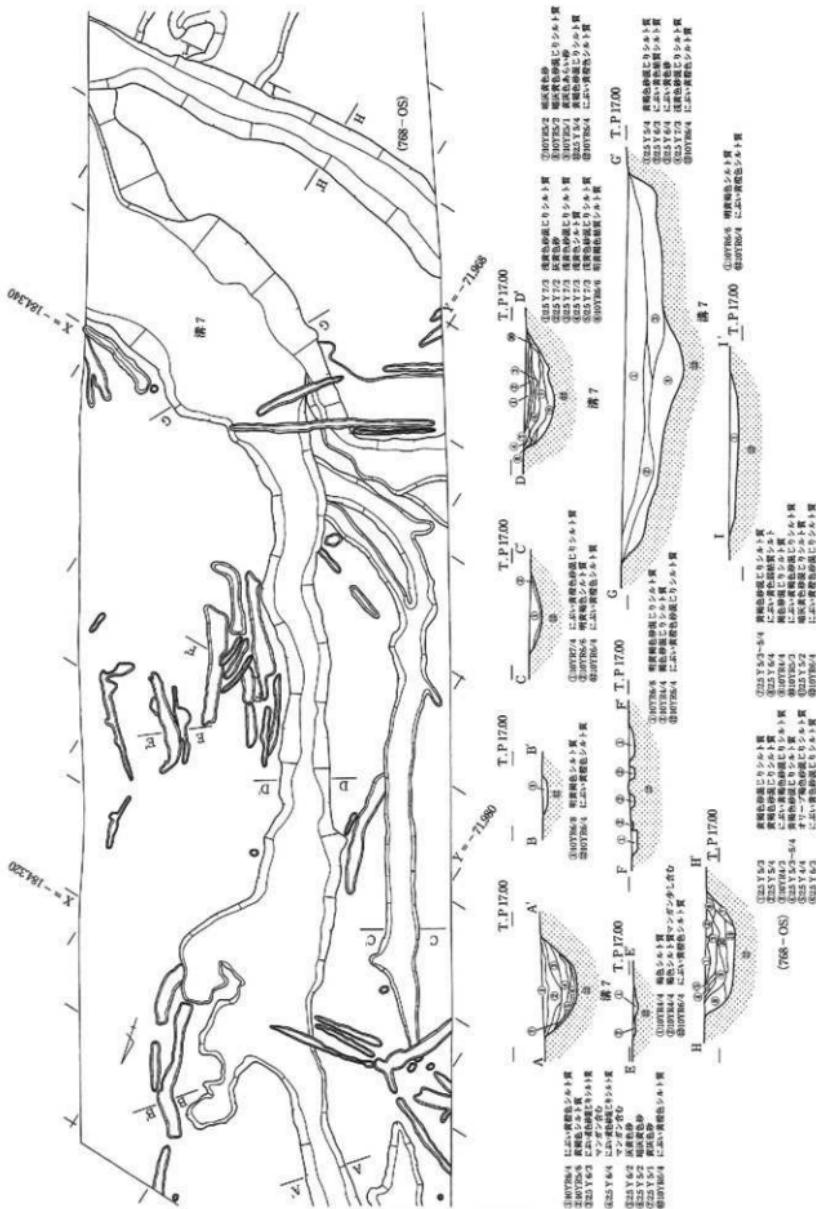
掘立柱建物 4（第6図）

7区北東端で検出した総柱の掘立柱建物である。南北2間、東西3間分を検出したがいずれも調査区内へ続く規模を有する可能性が想定される。検出規模は、東西5.3m、南北3.5mで、柱間は1.8m前後を測る。掘形の形状は方形を呈し、一辺0.5~0.6m、柱痕部は径約0.25mを測る。

柱穴1141-O P 挖方埋土から製塙土器（7・8）が出土している。

溝1020・溝1023・溝3317（第5図、第6図）

7区で検出された掘立柱建物及び柱穴群付近で3条の小溝が検出された。これらの小溝は掘立柱建物1の西方で東西に約12m走行し東端で南に屈曲する溝1020、掘立柱建物2の南側で調査区を東西に横断するように走行する溝1023、掘立柱建物3の柱穴を一部切る形で南北に走行する溝1015である。これらの溝は幅が0.50~0.70mと類似し掘立柱建物群をほぼ取り囲むように存在することから、一時期の掘立柱建物群の形成に伴って、区画等の機能を持って改作された一連の造構である可能性が高いものと判断されるが、他の柱穴同様、上部の一部は削平を受けており、調査区内で断片的に検出されたものであるため明確な連續性や機能については不明な点が多い。溝1023については、南側に平行して杭列と見られる小ピットが列状に検出されている。いずれの溝も出土遺物には乏しい。



第8図 奈良時代清7 平断面図

焼土坑6（第5図）

7区中央付近で検出された浅い焼土坑である。ほぼ方位と一致する一辺約3.3m以上の隅丸方形を呈し、深さ0.20mと浅く、埋土上半部は特に炭化物を多く含み灰黒色を呈する。須恵器の杯1点（1）が出土した。

土坑1012（第6図）

掘立柱建物3・4の間の調査区北辺で検出された不定形の土坑である。深さは0.1mと浅く明黄褐～にぶい黄橙色シルト層である。埋土には炭化物が含まれる他、廃棄された状況を窺わせる状態でややまとまって遺物が出土した。出土した遺物には、須恵器壺（10）、鉄鉢（11）、製塩土器（5・6・9）等がある。下部からは先行する柱穴が検出され、周辺掘立柱建物群の終焉に伴って形成された廃棄土坑としての性格が想定される。

掘立柱建物5（第7図）

27区東端で検出した掘立柱建物である。主軸が方位と約45°ずれ、7区で検出された掘立柱建物群とは様相を異にし、やや離れて単独で検出されている。1間×2間分を検出したが北西側は調査区外へさらに続く規模を有するものと思われる。柱間約2.25mを測るが、南東側では中央の柱がやや西よりにずれ柱間が1.70mと短くなっている。このことから建物本体は調査区外にあり、検出した南東部の1間は庇等の付随的部であるものと考えられる。検出面において須恵器杯蓋宝珠つまみ（33）が検出された他、3814ピットから須恵器杯、3419ピットからは須恵器壺細片が出土している。

溝3317（第7図）

掘立柱建物5の東側約8mで検出された南北方向の溝である。検出長約9mを測る。この溝を境に東側では7区を中心に検出された奈良時代の掘立柱建物を中心とする遺構は検出されず、この時期の東端を示すものと考えられる。

溝7（第8図）

2区東中央部を北東から南西へ向けて蛇行するように検出された溝状の自然流路である。最大幅6.4m、最深部の深さ0.98mを測る。溝周辺では風倒木跡や植物質纖維と思われる腐食した痕跡が検出され、かなり湿地状の自然地形であったことが窺われる。こうした状況は継続的に存在したものと思われ、溝最下層からは須恵器片や弥生土器底部、石礫等が出土し、溝上層からは中世の蛸壺（257）や平安時代の黒色土器（75・412・413）、土師質皿（428）が出土しており、最終的な埋没時期は中世後半と考えられる。以後、周辺は耕地化され平坦化されている。

第2節 鎌倉～室町時代の遺構と遺物

1区・2区及び11区を中心とした地区で1548のピットと多数の溝を検出した。これらの遺構はピットの掘方と中世包含層内の瓦器片から13世紀を中心とする時期に比定されるが、いずれも細片で図示し得るものは認められない。また一部黒色土器片も含まれており、これら一連の遺構群の初現は平安時代に遡ることも想定される。

検出されたピット群からは、掘立柱建物9棟を復元したが、建物の構成を明確にし得ない柱穴が多数存在する。これらのピット群は同一面で検出されており、明確な切り合ひ関係も認められない。上層は中世後半に耕地化されており、各ピットの埋土の状態もシルト質で酷似した状況を示す。掘方は灰黄褐色系シルト、柱痕部は黄褐色系シルトである。検出面である地山層は黄褐色弱粘質シルトである。

またこれらのピット群は1区及び11区に集中する傾向を示し、復元された建物も同一箇所で短期間に建て替えを繰り返すなど特異な状況が認められる。また後述する風招の出土等、建物の規模等は小規模ながら一般集落とはやや異なる様相と見ることも可能な遺構群である。

掘立柱建物8（第9図）

11区で検出した掘立柱建物である。桁行2間2.62mで柱間1.2～1.5m、梁行2間3.80mで柱間1.4～2.1mを測る。各柱穴は掘方が径約0.40m、柱痕部は径約0.15mを測る。遺物の出土は皆無に等しい。

掘立柱建物9（第9図）

11区の掘立柱建物8北側で検出した総柱の掘立柱建物で、掘立柱建物8・10・12と一部重複するが先後関係は明確にし得ていない。桁行2間3.18mで柱間約1.70m、梁行2間3.70mで柱間1.7～2.0mを測る。各柱穴は掘方が径約0.25～0.30m、柱痕部は径約0.15mを測る。遺物の出土は、土師器細片を柱穴2ヶ所より検出したのみである。

掘立柱建物10（第10図）

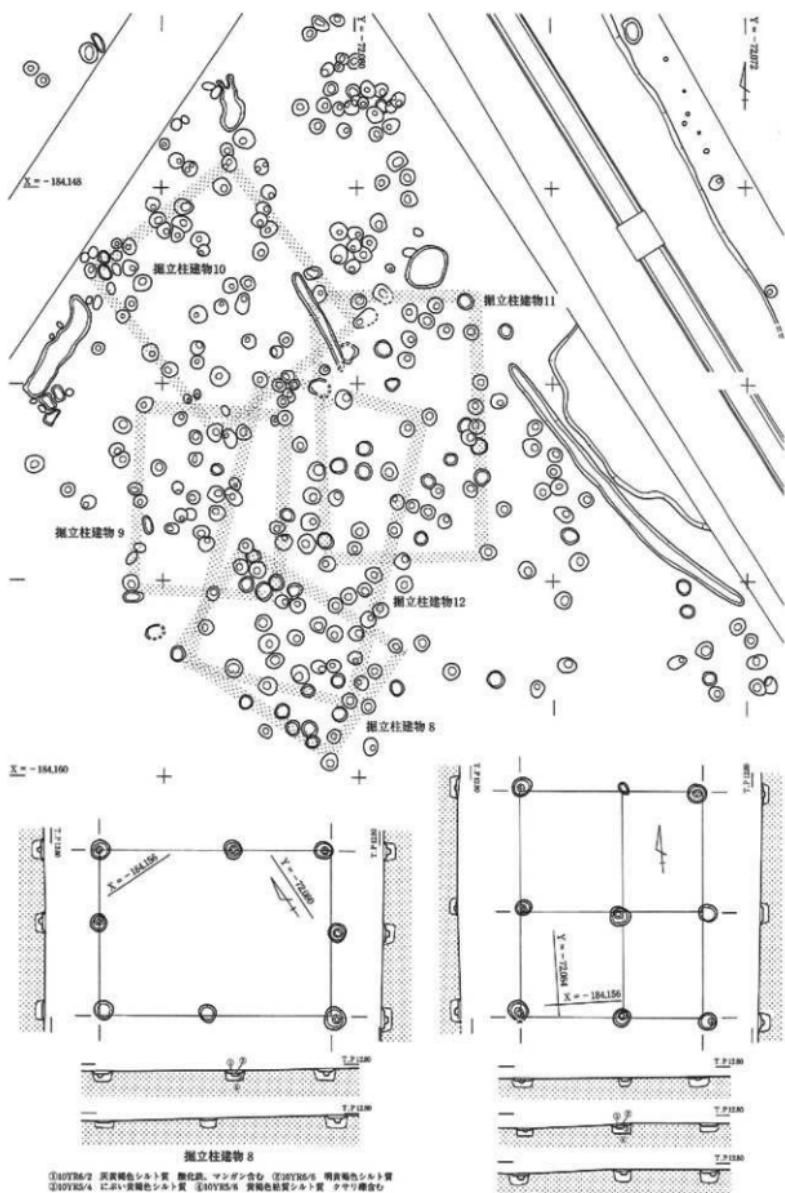
11区の掘立柱建物9北側で検出した掘立柱建物で、掘立柱建物9・11・12と一部重複するが先後関係は明確にし得ていない。桁行2間3.62mで柱間約1.7～1.9m、梁行3間4.18mを測るが、柱間は1.15～2.00mとややばらつきが見られる。柱穴2ヶ所より土師器細片が僅かに認められた。

掘立柱建物11（第10図）

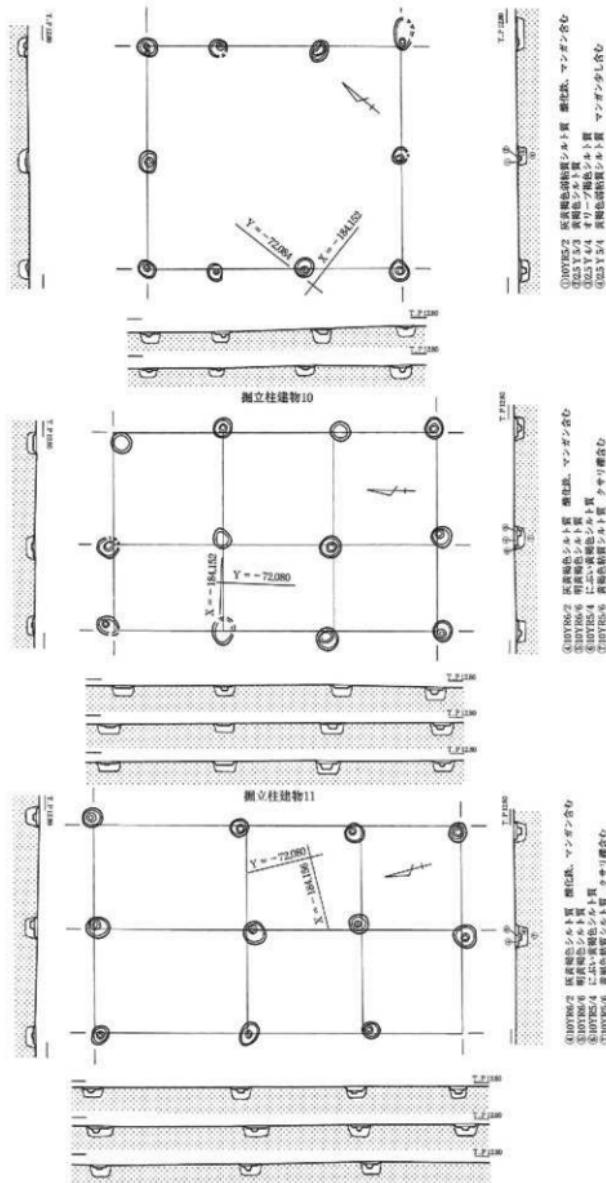
11区の掘立柱建物9とほぼ平行するように南北方向に主軸を置いてその東側で検出された総柱掘立柱建物である。掘立柱建物10・12と一部重複するが先後関係は不明である。桁行2間3.00mで柱間約1.3～1.7m、梁行3間5.50mで柱間約1.7～1.9mを測る。柱穴2ヶ所より土師器細片が若干出土している。

掘立柱建物12（第10図）

11区で検出した掘立柱建物で、他の4棟の掘立柱建物全てと重複関係を持つ。前後関係は明確にし得ていない。桁行2間3.58mで柱間約1.82mを測る。梁行は3間6.10mを測るが柱間は南側2間が約1.7～1.9mを測るのに対し、北側の1間分は約2.40mと広くとられている。他の建物同様、柱穴からの出土



第9図 鎌倉～室町時代掘立柱建物8・9 平断面図



第10図 鎌倉～室町時代掘立柱建物10・11・12 平面図

(1)DVS72 水路地盤地耐力シート質 塗化油、マンガル合む
 (2)DVS73 水路地盤地耐力シート質 塗化油、
 (3)DVS74 オリブ褐色シート質
 (4)DVS75 水路地盤地耐力シート質 塗化油、
 (5)DVS76 水路地盤地耐力シート質 テキサス合む

(1)DVS62 水路地盤地耐力シート質 塗化油、マンガル合む
 (2)DVS63 水路地盤地耐力シート質 塗化油、
 (3)DVS64 オリブ褐色シート質
 (4)DVS65 水路地盤地耐力シート質 テキサス合む

(1)DVS62 水路地盤地耐力シート質 塗化油、マンガル合む
 (2)DVS63 水路地盤地耐力シート質 塗化油、
 (3)DVS64 オリブ褐色シート質
 (4)DVS65 水路地盤地耐力シート質 テキサス合む

遺物は乏しい。

掘立柱建物13（第11図）

1区中央付近で検出した掘立柱建物で、掘立柱建物14・15と一部重複するが先後関係は明らかではない。桁行2間2.88mで柱間1.40mを測り、梁行は2間2.74mで柱間は東側で1.12m、西側で1.62mと東西で差異を持つ。東側桁行中央の柱穴を欠く。各柱穴は掘方の径0.30～0.40m、柱痕部の径0.10～0.15mを測る。

掘立柱建物14（第11図）

1区中央付近で検出した掘立柱建物である。桁行2間3.66mで柱間約1.80mを測り、梁行は2間2.74mで柱間は東側で1.54m、西側で1.22mと東西で差異を持ち、重複する掘立柱建物13と東西を逆転するものの同様の傾向を示す。南側梁行中央の柱穴を欠く。各柱穴は掘方の径約0.35m、柱痕部の径0.15～0.20mを測る。

掘立柱建物15（第11図）

1区中央付近で検出した掘立柱建物である。桁行3.48m、梁行2.60mを測る。各柱間は1.28～2.20mと大きなばらつきがあり、北梁行側では中间の柱穴を欠くなど構造上不明な点が多い。桁行、梁行とも遺存しない柱穴があるものと思われ各柱間数についても2ないし3と確定し得ない状況であり、遺存状況は良好とは言えない。

掘立柱建物16（第12図）

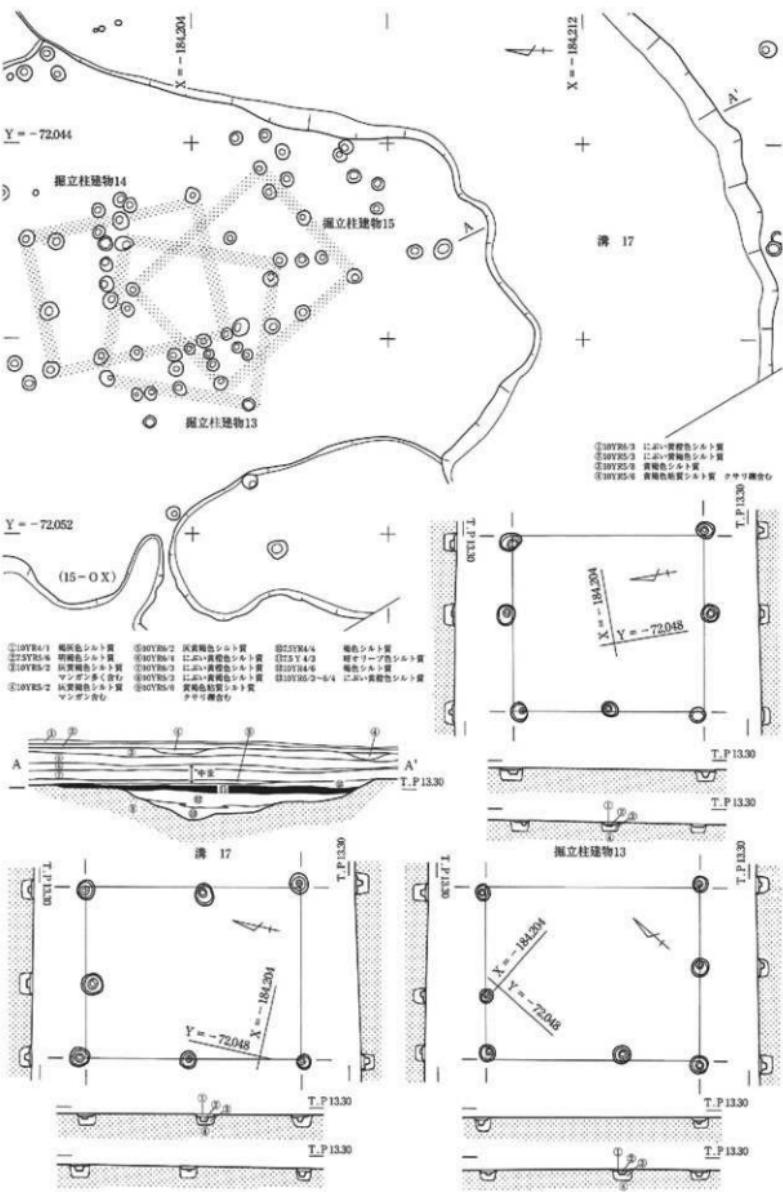
27区西南端で検出された総柱の掘立柱建物である。東西4間6.80m、南北2間分3.66mを検出した。南北方向については調査区外へさらに続く規模を有することも考えられるが、周辺の地形等から東西方向に梁行を置くものと見られ、最大でも建物規模は3間×4間程度と思われる。柱間は東西方向が1.7～1.9m、南北方向が1.6～1.9mを測る。各柱穴は掘方の径約0.25～0.40m、柱痕部の径0.15m前後である。柱穴2ヶ所より土器細片数点を検出したが、直接時期を判断し得るものは認められなかった。しかし後述する溝3220に先行する遺構であり、溝3220から出土した銭貨より、中性前半までに構築され短期間に廃絶したものと判断される。

溝3220（第12図）

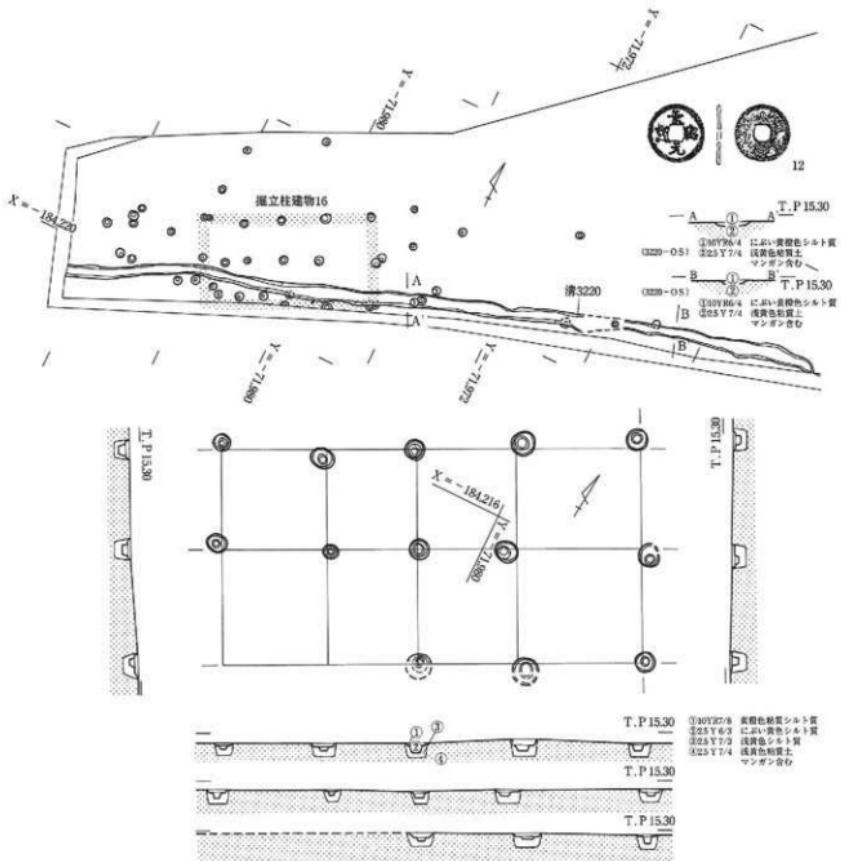
27区西南端で検出された掘立柱建物16を切るように東西に走行する溝である。検出長約31m、幅約0.40mを測る。深さは約0.10mと浅く上部は削平を受けているものと見られ、埋土はにぶい黄橙色シルト層である。埋土内から貨銭（12）が出土した。景德元寶（1044年）か景祐元寶（1034年）と判断されるが遺存状態が悪く決め手に欠く。いずれにしても活発化した中世前半の交易に伴う輸入宋銭であり、検出された中世遺構群の時期や性格を示す貴重な資料と言える。

溝17（第11図）

1区中央付近を横断するように検出されたほぼ東西方向に蛇行しながら走行する溝状の遺構である。



第11図 鎌倉～室町時代掘立柱建物13・14・15、満17 平断面図

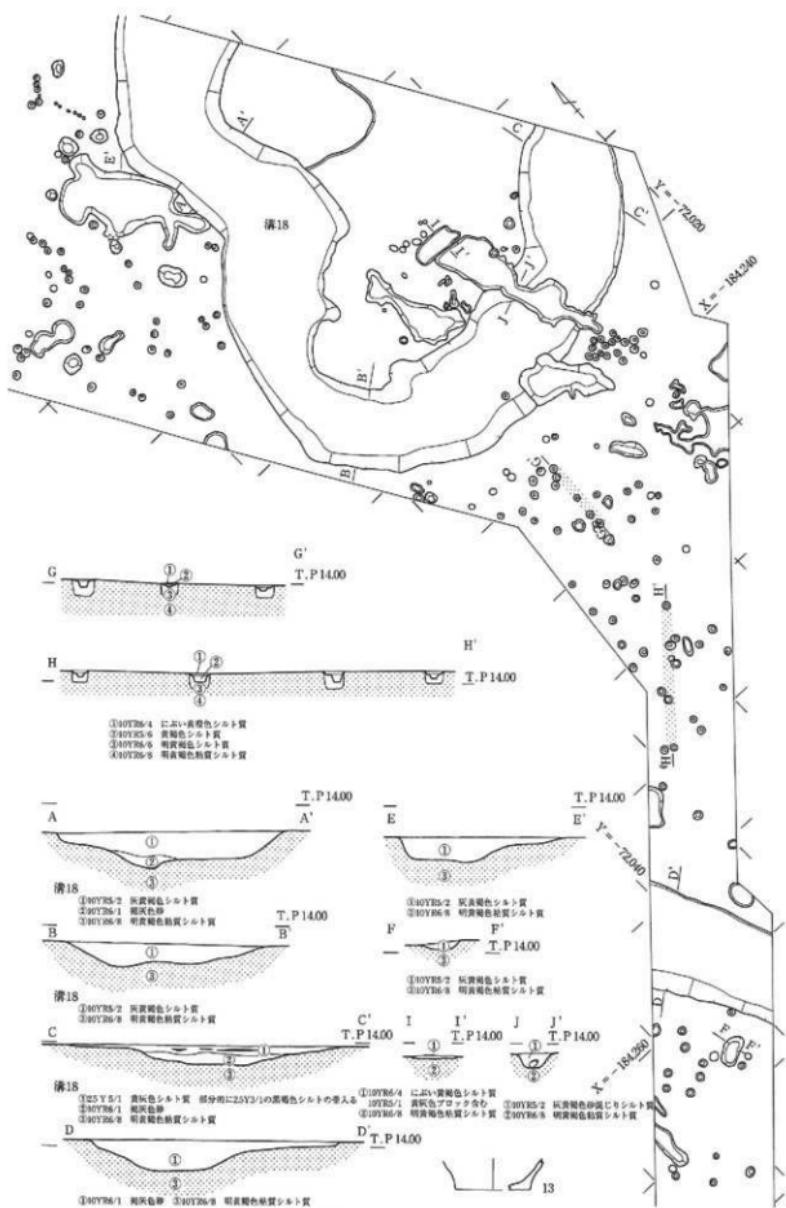


第12図 鎌倉～室町時代掘立柱建物16 平断面図

堆積状況から周辺のピット群の上層よりやや遅れて形成された自然流路と考えられる。後の耕作面化する状況等から中世期に形成されたものと判断され、こうした蛇行する自然流路の形成が周辺での河川増水や氾濫といった状況を示すものと思われ、中世遺構群の終焉時期や要因を示唆するものと考えられる。

溝18（第13図）

1区南半で検出された溝17と同様の蛇行する溝状の遺構である。堆積状況も同様で中世期に形成されたものと見られ、本来は溝17と一緒に自然流路の一部として形成されたものと考えられる。最下層より奥の底部（13）が出土した。弥生時代中期の所産と考えられるが磨耗が著しく明確に時代決定し得ない遺存状況である。上流域に弥生時代の諸遺構が展開する可能性を示す遺物として注目される。



第13図 鎌倉～室町時代溝18 平断面図

第3節 江戸時代の遺構と遺物

事業予定地内に天神池が含まれていたため、その形成過程を確認することも兼ねて調査を実施した20区を中心として、天神池に関連する遺構や近世耕作面が検出された。

堤下の西側に当たる20区3では、鋤溝群や近世の溝が検出されている。

池19<天神池>（第14図）

現在の天神池の調査である。現在の池の規模は東西50m南北約200mを測り、やや隅丸長方形を呈している。山の中腹部を掘削し堤を構築して水を堰き止めている。道路予定地部分が池の堤2箇所と最深部に当たるため、主として築造時期と構造を明らかにすることを目的として調査を実施した。

池の堤部分において、現在の堤頂部より約1m下層に旧堤体が検出された。堤の内側には堤基底部に沿って二重の杭列が検出された。旧堤体の版築部分からは遺物は検出されず、明確な築造時期を判断するには至らなかった。

池内部の堆積状況から判断すると、旧堤体が巡っていた範囲は現在の堤体よりはかなり小規模であつたことが窺われる。

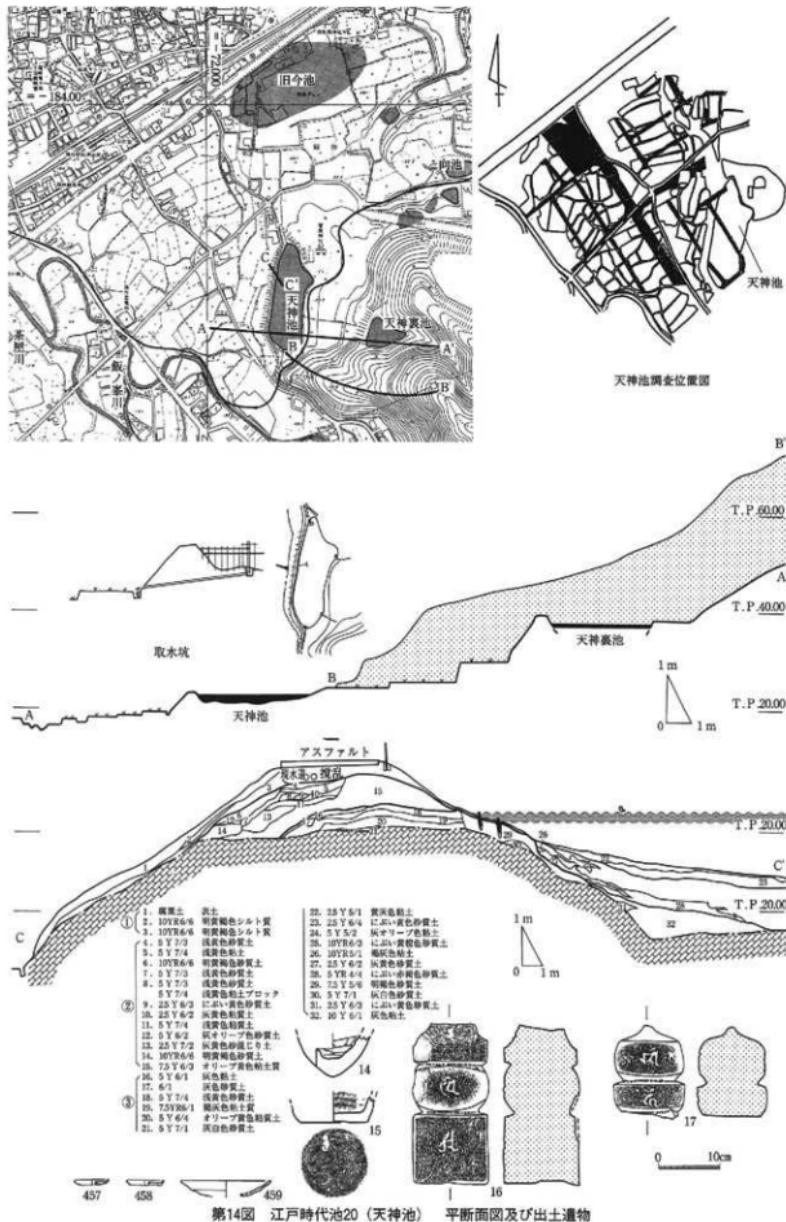
池底の堆積層からは中世の蛸壺（14）や近世の糸切り底を持つ平底の蛸壺（15）、近世の五輪塔（16～17）が出土している。これらの出土遺物は、毎年行われる池さらえの際や堤の改修時に付近の土を鋼土として用いることにより混入した可能性もあり、池の構築時期を直接示すとは考えがたい。

溝3502（第14図）

20地区3で検出された天神池の取水口にあたる溝である。近世の五輪塔（16）が取水口をふさぐ石に転用されている。

鋤溝群

天神池堤下の西側の20地区3では、調査区全体で近世耕作面が検出され、ほぼ全面にわたって鋤溝が検出されている。地山直上に確認された薄い包含層には、須恵器や黒色土器の破片とともに土師皿（457・458）や瓦器椀（459）も含まれることから、少なくとも丘陵斜面の開発は池の築造よりは先立つて行われていたことが窺われる。



第14図 江戸時代池20(天神池) 平断面図及び出土遺物